

3. 4 伊香保温泉

3.4-1 伊香保温泉の地理と概要

伊香保温泉を管轄する群馬県渋川市の概要を表-3.4, 伊香保温泉の周辺地図を図-3.11に示した。

表-3.4：群馬県渋川市の概要

管轄する自治体	群馬県渋川市		
面積	240.42 km ²	人口	87469 人
交通	JR上越線・吾妻線(渋川駅、他7)、関越自動車道(渋川伊香保IC、赤城IC)、国道17・353号		
観光資源	伊香保温泉、芸術の散歩道「アルテナード」(桑原巨守彫刻美術館、徳富蘆花記念文学館ほか)、日帰り温泉(小野上温泉ほか)、白井宿、水澤観世音、正蓮寺、小野池あじさい公園、棚下不動滝、観光竹かんむりに染、水沢うどん街、観光農園(いちご、ブルーベリー、りんご等)		
イベント	白井宿八重ざくら祭り(4月)、清流まつり(5月)、宮田ほたるまつり・小野池あじさいまつり(6月)、渋川へそ祭り(7月)、伊香保ハワイアンフェスティバル・渋川山車まつり(8月)、伊香保まつり(9月)、日本のまんなか渋川駅伝(11月)、黒井嶺マラソン(12月)、小野上温泉マラソン(1月)、石段ひなまつり(3月)		
特産品	まいたけ、しいたけ、こんにゃく、りんご、いちご、ブルーベリー、花き、水沢うどん、そばこがねいも、漬け物、湯の花まんじゅう、創作こけし、関東の華、こもちんち・伊香保男爵(じゃがいも焼酎)、こもち姫(いちごリキュール)		
日本一	日本のまんなか渋川駅伝(市民駅伝で最古)、こんにゃくいも(生産量)、温泉まんじゅう(発祥の地)		

※出典：東洋経済、『都市データパック 2010年版』, 2010 の内容を抜粋・再編集して作成



図-3.11：伊香保温泉の周辺地図

伊香保温泉の最寄り駅は、JR 渋川駅である。渋川駅は東京駅から新幹線と在来線を乗り継いで約1時間30分の位置にある。また、渋川駅から伊香保温泉までは路線バスでさらに25分程度を要する。伊香保温泉のシンボルである石段の両側に、温泉旅館や土産屋、射的屋、公共温泉等が立ち並び、温泉都市計画発祥の地としても知られる。湯元は、石段街の東側にあり、県道15号線と33号線の接続点付近にある。石段を上った先のアイストップの位置には伊香保神社がある他、周囲には榛名山や水沢観音などの観光スポットも存在する。

伊香保温泉には、黄金の湯と白銀の湯の2種類があり、いずれかを提供する旅館と、両方を提供する旅館がある。



写真-3.14 温泉都市計画記念碑



写真-3.15 石段の街並み



写真-3.16 公共温泉



写真-3.17 石段と伊香保神社

3.4-2 調査方法

調査は文献調査及びヒアリング調査によって行った。文献調査では、渋川市役所経済部観光課提供資料の他、伊香保温泉品質向上委員会『心づくしのおもてなし 伊香保豆手帖』、鵜飼克郎『ウソの温泉ホントの温泉』、各種パンフレット等も参考とした。

また、渋川市伊香保総合支所では資料請求とともに、ヒアリングも行い、石段街のイメージを構築，強化するプロセスの把握に努めた。

3.4-3 伊香保温泉ブランドの変遷

伊香保温泉ブランドを取巻く出来事と観光客数の経年変化を図-3.12 にまとめた。

伊香保温泉の観光客数は、1950年代後半からの、渋川伊香保間有料道路や伊香保榛名有料道路の開通を契機に増加を始める。そして、石段の大改修(1980年～1985年)や公共温泉の落成(1981年)と同じタイミングで日帰り観光客の数・割合が増加する。1989年には入込客数が年間250万人を突破し、その状況が1995年まで続く。この時期には周辺でのスポーツイベントが多く開催されている。しかしながら、1996年以降、入込客数と宿泊客数は減少を始め、2004年の温泉偽装問題の際には、入込客数は157万人弱にまで落ち込んだ。その後も、温泉偽装問題時に比較して若干回復したものの、全体としては観光客数の減少傾向が続いている状況にある。

また、旅館数に関しては1950年代後半からの観光客の増加に対応するように、1955年に30軒であった旅館数も増加を始め、1977年と1983年には67軒に至った。その後、観光客数の減少に伴い、旅館数も減少に転じ、2010年には53軒にまで減少した。

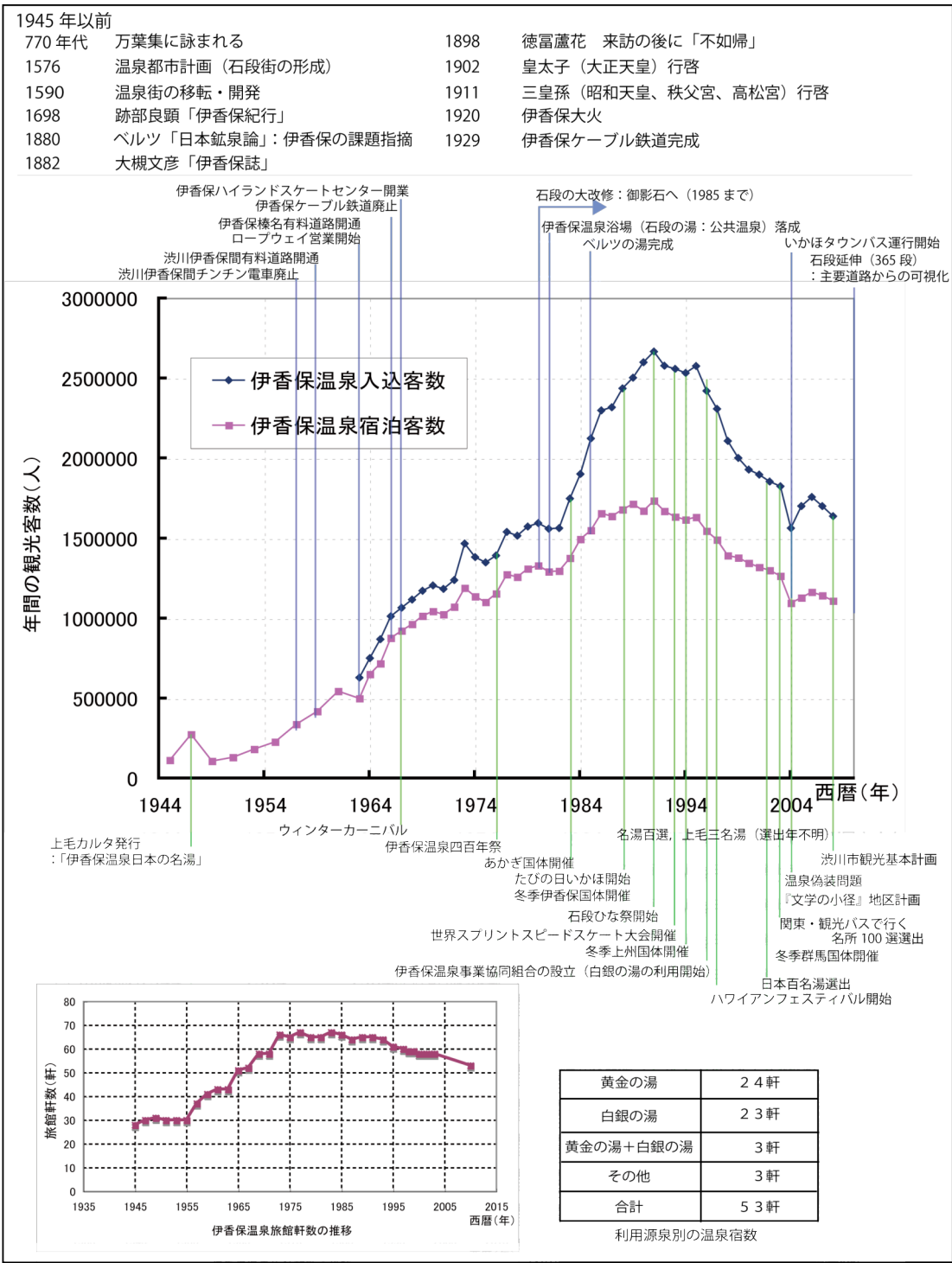


図-3.12 伊香保温泉ブランドを取巻く出来事と観光客数の経年変化

3.4-4 伊香保温泉のイメージ認知/保全プロセス

伊香保温泉のイメージを変化させた社会・潜在的要素とその構造を図-3.13にまとめた。

1575年の長篠の戦いにおいて敗戦した武田勝頼軍の多くの負傷者を治療するため、伊香保温泉は浴舎を現在の場所に移した。同時に、源泉から導管を用いて、効率的に温泉を各宿に配る必要性が生じた。このため1576年に石段や基盤の整備が行われ、これが日本の温泉都市計画の発祥とされている。その後、1600年頃には寺社巡りや慰安旅行、温泉療養が流行し、血行促進や婦人病に効果のある伊香保温泉への訪問者は増加する。また、紀行文、俳句、短歌へ頻繁に登場するようになり、温泉の効能も手伝って「子宝の湯」と呼ばれるようになる。その後、小説家徳富蘆花が訪れ、1898年に伊香保温泉を舞台とした「不如帰」を発表している。これを契機に、伊香保温泉は石段街として認知されるようになった。

一方、温泉都市計画以降、温泉の計量方式がないことによる争いが増え、伊香保温泉独自の分湯方式（小間口制度）が成立していく。これにより、温泉（黄金の湯）の引湯権を得た14名の「大屋」が発生する（現在の大屋は13名）。この大屋は源泉をその他の多くの旅館に分湯したが、①湯量に限度があること、②高額であること、③内密に分湯がされていることから、格差の発生や不透明感が生じた。結果、不正への指摘が困難な状況も生まれ、偽物や水道水を使った温泉が発生した。また、閉鎖的な地域性もあり、黄金の湯を保有する旅館は、①家訓として温泉の権利は売却しない、②年間降雨量を根拠とする源泉管理（最大毎分5000ℓ）、③各旅館の引湯量から掛け流し可能な宿泊客定員を決定、という方針を持つようになった。このため、新興の温泉旅館は温泉を確保できない状態となり、偽物や水道水の使用に拍車がかかった。このため、対策として1996年に渋川市は新源泉を発見し、白銀の湯と名付け、黄金の湯をもらえない新興の宿に分湯した。

こうした新興の旅館は、バブル経済時には借金をして増改築をし、マストツーリズムに対応しようとする傾向があった。増改築により、高級感の演出や客単価の向上を狙った。しかしながら、この動きにより、伊香保温泉全体の収容人数が増加した。また、バブル崩壊後は宿泊客数が減少し、結果として値引き合戦や費用節約をする必要が生じた。具体的には、食事や内装を優先した方が集客効果が大きいと見込み、家族風呂のみに温泉を使い、大浴場には水道水を利用し、入浴剤使用や浴槽を茶色にするなどの「偽装」を企てた。そして、「一部でも天然温泉ならば可」であることから、日本温泉協会より天然温泉の看板を受け、掲示していた。また、こうした新興宿の使う温泉は、白銀の湯であり、白銀の湯自体の成分がほぼ井戸水であった。また当時の白銀の湯の湧出量と使用旅館数を見ると、循環利用は必須となるとの指摘もある。すなわち、井戸水に近い成分にもかかわらず、循環や塩素の投入、高い使用料(500万円+工事費)を余儀なくされる白銀の湯であっても、最低限の利用に抑えることで、天然温泉を利用している体裁をとることが法的に可能となり、また利益も最大化するといえる。天然温泉の看板があれば、観光客側としては、当然全てが天然温泉であると考えた。しかし、上記のような企てがあることが、白骨温泉と同様に、2004年8月に週刊ポスト「名湯・伊香保温泉は水道水だった」で報じられ、観光客の減少、信頼の低下を招いた。対策として、黄金の湯に関しては小間口権組合長が、白銀の湯に関しては役場が証明書を発行した。白銀の湯に関しては新源泉の発見もされた。また、石段街としてのイメージの強化策として、石段の延長工事が行われ、2010年に完成した。これにより、バスや自動車の行き交う群馬県道33号から石段街が見えるようになった。

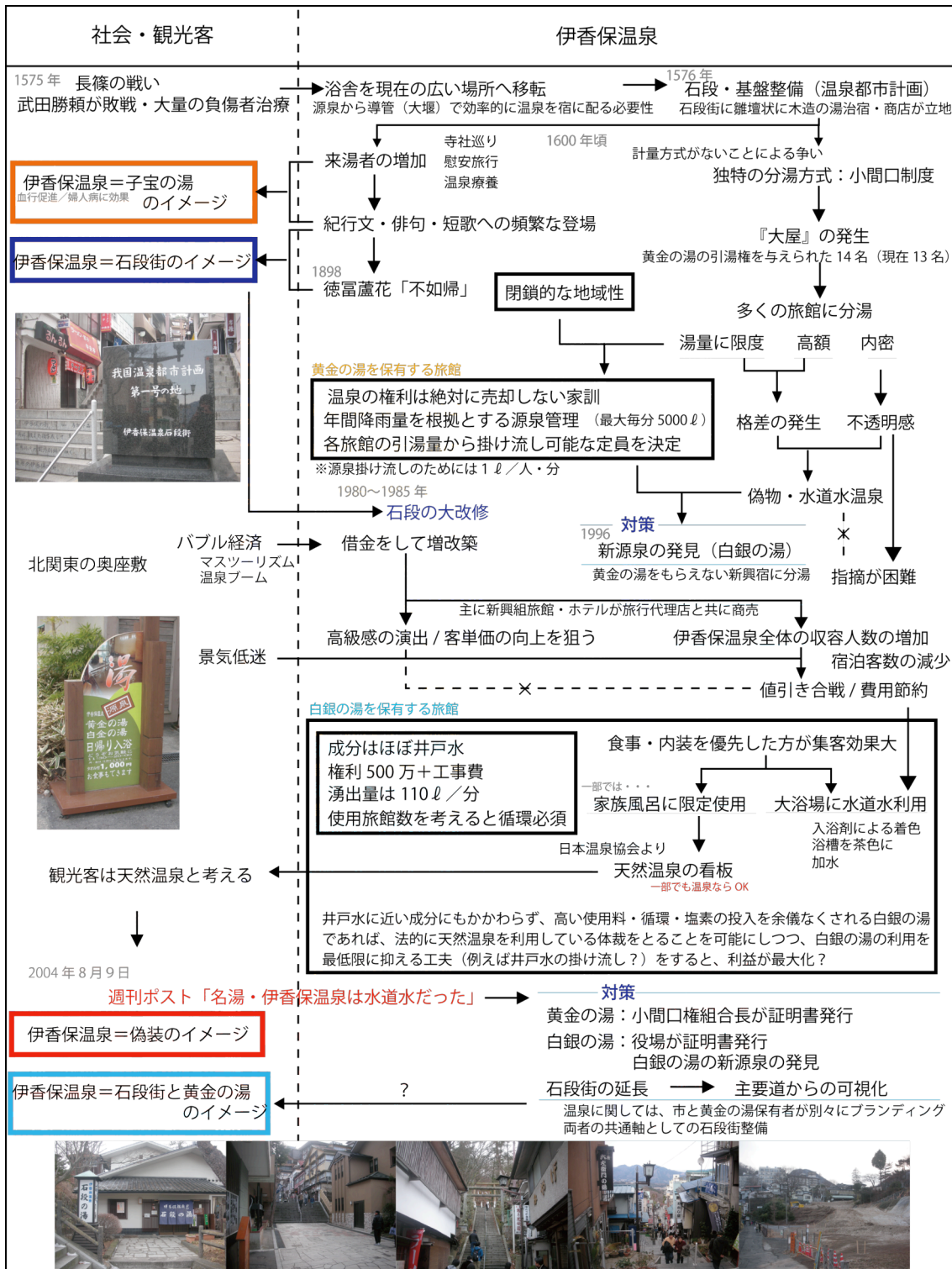


図-3.13 伊香保温泉のイメージを認知・変化させた社会的・潜在的要素とその構造

3.5 摩周湖

3.5-1 摩周湖の地理と概要

摩周湖を管轄する北海道弟子屈町の概要を表-3.5, 摩周湖の周辺地図を図-3.14 に示した。

表-3.5 : 北海道弟子屈町の概要

管轄する自治体	北海道川上郡弟子屈町		
面積	774.53 km ²	人口	9023 人
交通	JR釧網本線(川湯温泉駅、美留和駅、摩周駅、南弟子屈駅) 国道241・243・391号		
観光資源	阿寒国立公園、摩周湖、屈斜路湖、温泉(コタン、摩周、和琴、川湯)、 弟子屈町屈斜路コタンアイヌ民俗資料館、弟子屈町川湯相撲記念館、硫黄山		
イベント	弟子屈・川湯神社例大祭・たぶん日本で一番早い新そば祭り(8月)、 ダイヤモンドダストパーティー(1~2月)、摩周ウインターフェスタ(2月)		
特産品	メロン、そば、じゃがいも、かぼちゃ、たまねぎ		
日本一	屈斜路湖(日本一広いカルデラ湖)、摩周湖(透明度日本一)、ミンミンゼミ生息の北限		

※出典：1)市町村要覧編集委員会、『全国市町村要覧[平成21年版]』, 2009
2)弟子屈町HP：<http://www.town.teshikaga.hokkaido.jp/> の内容を抜粋・再編集して作成



図-3.14 : 摩周湖の周辺地図

摩周湖は、札幌駅から特急と在来線を乗り継ぎ、約5時間30分かけてJR摩周駅まで行き、そこからバスで30分程度で第一展望台に到着する。摩周湖には第一展望台と第三展望台、裏摩周展望台がある（第二展望台は閉鎖中）。

摩周湖は世界的にも屈指の透明度の高さを持つカルデラ湖で、湖沼面積19.1km²は日本で20番目となる。摩周湖はカルデラの凹地に水がたまって成立したとされる。摩周湖は、

- ① 流入・流出する河川がなく、生活廃水の影響を受けないこと
- ② 周囲の降雨も土壌に浸透・ろ過されて流入すること
- ③ 水温や気温の低さから一帯の有機性分解が進まないこと
- ④ 環境保護が厳重に行われていること

などから、人的な影響をほとんど受けず、高い透明度を保っていると考えられている。

また摩周湖の周囲は19.8kmであるが、道路は弟子屈町側(湖岸の西側から南側)と清里町側(湖岸の北側)に整備されているものの、両者の接続はなく、湖岸を一周するかたちでの観光道路は整備されていない。バスは摩周駅と川湯温泉駅から発着しているが、冬季に利用できるのは摩周駅からのバス便だけとなり、その他はツアー観光バス、レンタカー、タクシーなどの交通手段で展望台を訪れることになる。

周囲には屈斜路湖、神の子池、硫黄山などの観光資源が点在する。



写真-3.18 霧の摩周湖



写真-3.19 摩周ブルー



写真-3.20 霧で湖面が見えない摩周湖



写真-3.21 第一展望台を訪れる観光バス

3.5-2 調査方法

調査は文献調査及びヒアリング調査を実施した。文献調査では、弟子屈町役場観光商工課提供資料の他、国立環境研究所「摩周湖モニタリングデータブック」、敷田麻実「観光地域における非営利・営利組織のガバナンスと協働モデルにかんする研究-北海道弟子屈町の事例分析から-」、田口誠「てしかがえこまち推進協議会の挑戦」等も参考とした。

また、弟子屈町役場では統計データの請求とともに、ヒアリングも行い、摩周湖のイメージ認知や保全プロセスの把握に努めた。訪問時は霧がかかって湖面が見えない状態であったため、弟子屈町役場より、写真-3.18, 写真-3.19, 写真-3.22, の提供を受けた。ヒアリングは摩周湖観光協会でも行った。

3.5-3 摩周湖ブランドの変遷

摩周湖ブランドを取巻く出来事と観光客数の経年変化を図-3.15 にまとめた。

摩周湖周辺では、1929年から1931年にかけて鉄道の開通が相次いだ、釧網線が開通した1931年には摩周湖が世界一の透明度を記録した。その後、国立公園指定や展望台及び展望台までの道路整備、遊覧飛行場の整備が進み、観光地として成立していった。1966年には歌謡曲「霧の摩周湖」を布施明が歌い、以後摩周湖の入込客数も伸びていく。1974年に初めて入込客が年間100万人を突破し、1984年まではほぼ横ばいで推移する。その後は全国的な好況に支えられながら入込客数をさらに伸ばし、NHK連続テレビ小説「君の名は」が放送された1991年には136万人弱の観光客が訪れた。

バブル経済が崩壊した後、旅行者は国内志向になった。このため、一時的には摩周湖は観光地として選ばれることが多くなったが、マスツーリズムの終焉傾向もあり、すぐに減少に転じた。その後は、入込客数は減少を続け、近年では62万人弱にまで落ち込んでいる。近隣の屈斜路湖は摩周湖ほどの下げ幅にはなっておらず、道東エリアとしてではなく、摩周湖が目的地・経由地として選ばれなくなってきている状況にある。

現在、中国映画「狙った恋の落とし方。」が道東を主な舞台としていたことで、中国において道東観光ブームとなっている。今後、観光客の増加や内訳の変化が予想される。

摩周湖の特徴である透明度に関しては、1931年をピークに低下傾向にある。当時の最大透明度は41.6mであり、1911年にバイカル湖が記録した40.5mを上回り、世界一となった。しかし、現在の透明度は20mに満たず、バイカル湖に抜かれ2番目となった。

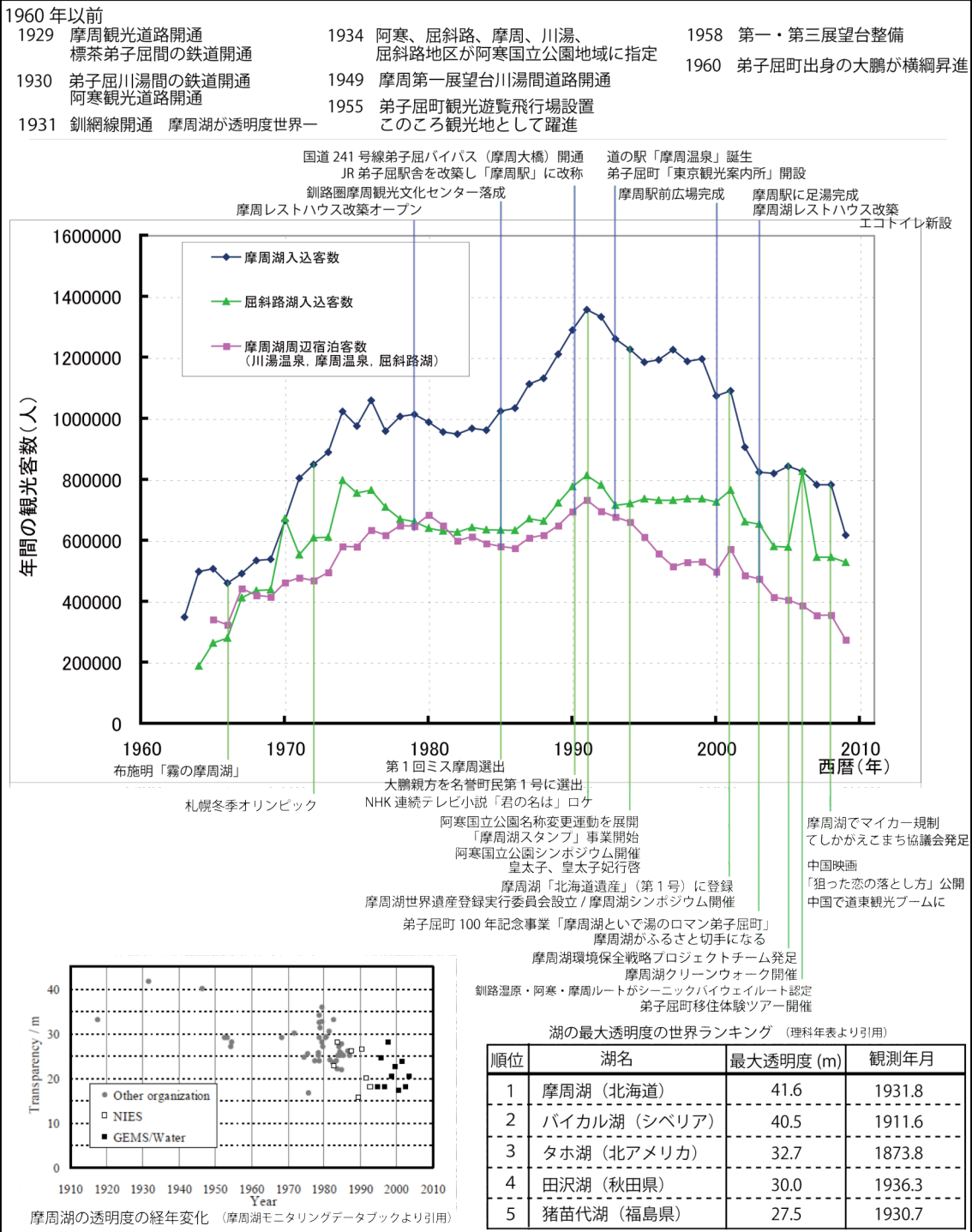


図-3.15 摩周湖ブランドを取巻く出来事と観光客数の経年変化

3.5-4 摩周湖のイメージ認知/保全プロセス

摩周湖のイメージを変化させた社会・潜在的要素とその構造を図-3.16にまとめた。

摩周湖は1931年に透明度世界一を記録し、景観的にも摩周ブルーと呼ばれる特異性を持つ。また、頻繁な霧の発生、伝説や名称の謎、水位が不変であること、湖畔の斜面勾配が急峻さ、カルデラ内部に立ち入りができないことなどから、摩周湖は神秘的な湖として認知されてきた。

1966年には布施明氏が歌った歌謡曲「霧の摩周湖」により、摩周湖は霧や神秘的なイメージが広く認知されるようになった。最近では霧関連商品が開発され、テレビでも話題になった。現在、観光客数は減少傾向であるが、中国映画「狙った恋の落とし方。」のヒットにより、中国で道東ブームがおきている。

また、環境保全や観光客滞留の促進を目的に、てしかがえこまち推進協議会が設立された。この会には、観光事業者だけではなく、主婦や子供も参加しており、

- ① フォーラム・セミナーの開催
- ② 観光カリスマ塾
- ③ エコツアーガイド養成講習会
- ④ パンフレット・マップの作成
- ⑤ メニュー開発・商品化

など、地域の観光や環境を取り巻く多様な活動を展開している。またてしかがえこまち推進協議会が主体となって（株）ツーリズムてしかがを設立し、地域密着型の旅行業者としてPR・販売活動を行っている。

この他にも鉄道駅や公的団体の“摩周”への名称変更、ツーデーパス、釧路との連携による観光圏整備など、観光目的地として摩周湖が選ばれるための取組みが続いている。

一方、摩周湖の透明度は現在、低下傾向にある。以下に考えられている説を挙げる。

(1) 観光客の急増が原因とする説

モータリゼーションの進展や交通網整備、1958年の展望台整備を契機に摩周湖の観光客数は急増した。自動車からの排気ガスは摩周湖岸の草木の立ち枯れを招き、斜面の保水力が低下した。これにより湖畔の斜面崩落が生じ、透明度の低下を招いたとする説。

(2) エゾシカが原因とする説

摩周湖周辺では、エゾシカが増加しており、摩周湖岸のクマザサへの食害が報告されている。また、樹木を枯死させる原因にもなる。この結果、湖岸の保水力の低下、斜面崩落が生じ、透明度の低下を招いたとする説。



写真 3.22 摩周湖の斜面の様子

(3) 放流事業が原因とする説

摩周湖では、1926年から1974年まで、ヒメマスやニジマスの放流事業が行われ、そのエサとなるエビやザリガニも併せて放流された。これにより、ミジンコ等の微生物が減少するとともに、植物プランクトンが増加し、結果として透明度の低下を招いたとする説。

(4) 1952年の十勝沖地震が原因とする説

(5) 中国での農薬使用が原因とする説

しかしながら、どの説も透明度低下との因果関係は証明されていない。こうした状況の中、弟子屈町は対策として2008年にマイカー規制とBDFを用いた代替バスの運行を行った。摩周湖は地理的に通過型観光地となりがちである。こうした状況から、乗り換え場を市街地に設置することで、摩周湖への観光客を市街地へ誘導する狙いがあったものといえる。しかし700円という料金を徴収したことから観光客からの苦情は多く、また、この施策を決定した協議会に環境の専門家がいなかったことなどから、環境対策としての批判も多い。北海道大学の皆角潤准教授は「矛盾だらけのマイカー規制」の中で、

- ・ バスの平均乗車人数が10人未満の現状ではエコカーや二輪車の方が環境効率が良いこと
- ・ 排気ガス(CO₂, NO_x)と透明度低下の因果関係が不明であること
- ・ 排気ガスを原因とするならば、摩周湖観光客限定とする根拠が成立しないこと

を指摘し、不正確な根拠と環境保護のもとに負担を強制する“エコ偽装”であると主張している。ヒアリングの際、弟子屈町役場の職員にこの論文について尋ねたところ、論文の存在は知っており、「意図していない部分で話題になってしまった。観光振興と環境の両立を果たし、その運営費を得るための施策だった。批判するだけではなく、アドバイスが欲しかった。」と述べていた。弟子屈町では、以後、マイカー規制は実施していない。

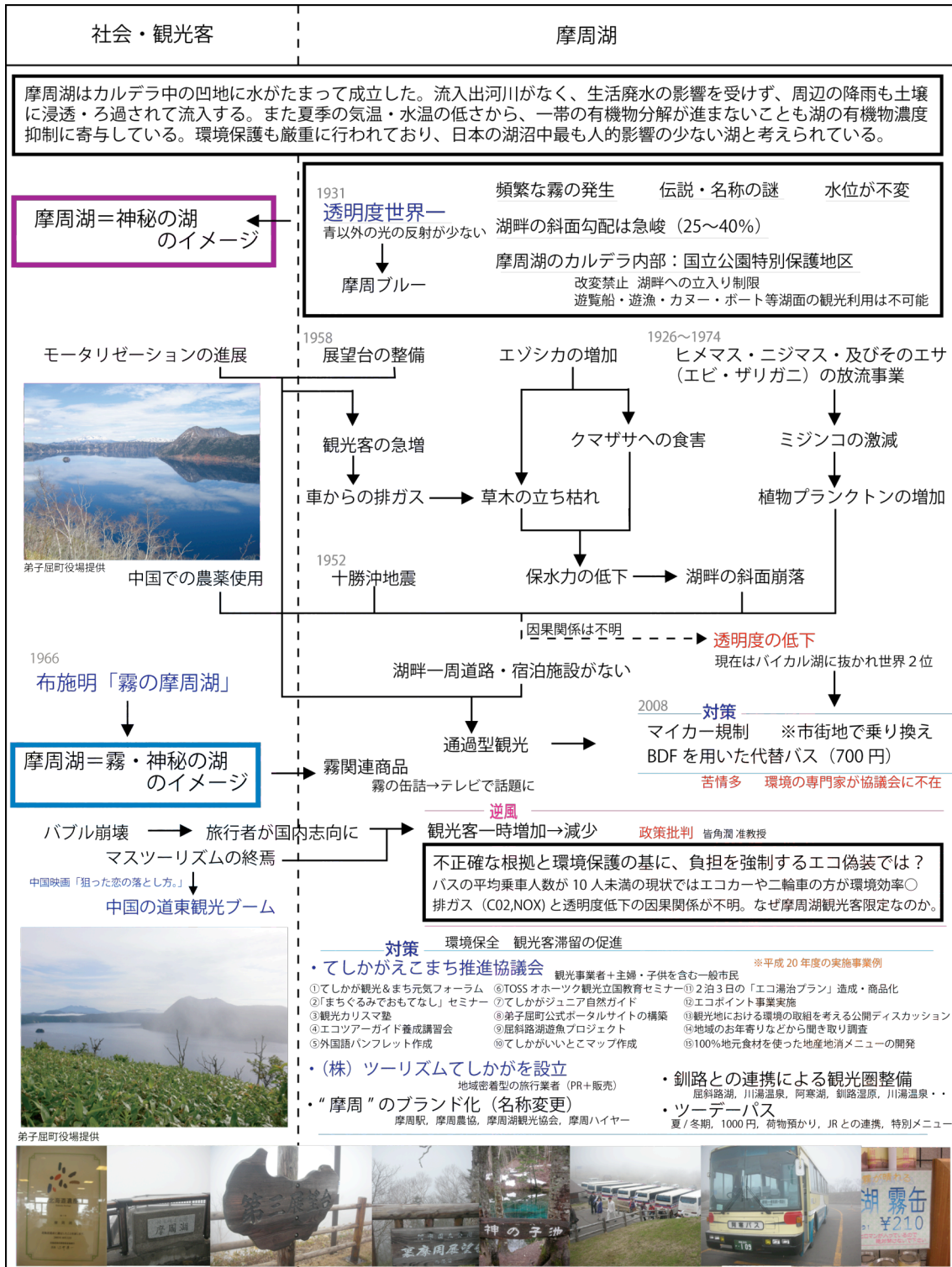


図-3.16 摩周湖のイメージを認知・変化させた社会的・潜在的要素とその構造

3.5-5 摩周湖における世界遺産登録構想の失敗とその要因

2001年に摩周湖世界遺産登録実行委員会が商工会青年部を中心として設立された。これまでに摩周湖の環境保全活動や啓蒙活動などを行ってきた。同委員会のホームページⁱⁱⁱ⁻⁴によれば、最終的な目的は摩周湖を世界遺産に登録し、資源の保全と“世界遺産の摩周湖”とすることで、経済的なメリットを得ることにある。同委員会は登録に向けた調査や働きかけを行ってきた。しかしながら、現在までに、国内の暫定リストや検討リストにも記載されていない状態が続いている。近隣の知床が2005年に世界自然遺産に登録されて以来、摩周湖を世界遺産にしようとする活動は意気消沈している状況にあるという。

原因は、同委員会以外の摩周湖関係者が世界遺産登録運動に関して盛り上がらなかった点にある。知床の場合、しれとこ100平方メートル運動により、開発事業から知床の自然を保護しようとする活動があり、それが世界自然遺産への登録に向けた動きに繋がった経緯がある。しかしながら、摩周湖の場合は、唐突に世界遺産登録に向けた活動が始まった印象が町内にあり、活動の熱が上がりきらなかった。

知床の場合はしれとこ100平方メートル運動により、町全体として資源とその価値認知及び保全意識が高まった後に、世界自然遺産登録という一種の地域ブランディングを掲げ、達成した。摩周湖の場合は最近になって、てしかがえこまち推進協議会の設立や観光基本計画の策定に向けた動きが見られるものの、前提・脈絡のない形で世界遺産への登録を掲げた。そして、世界遺産登録によるブランディングという意味では失敗した。

iii-4 摩周湖世界遺産登録実行委員会 HP : <http://www.masyuko.net/sekaiisan/>

3. 6 尾瀬

3.6-1 尾瀬の地理と概要

尾瀬を管轄する群馬県片品村，福島県檜枝岐村，新潟県魚沼市の概要を表-3.6，尾瀬の周辺地図を図-3.17 に示した。

表-3.6：尾瀬を管轄する自治体の概要

管轄する自治体	群馬県片品村・福島県檜枝岐村・新潟県魚沼市		
面積	片品村 : 392.01 km ² 檜枝岐村 : 390.50 km ² 魚沼市 : 946.93 km ²	人口	片品村 : 5478 人 檜枝岐村 : 706 人 魚沼市 : 43555 人
交通	片品村	奥鬼怒スーパー林道 国道120・401号	
	檜枝岐村	国道352・401号	
	魚沼市	JR上越線・只見線(小出駅他)、関越自動車道(堀ノ内IC、小出IC)、 国道17・252・290・291・352号	
観光資源	片品村	スキー場(丸沼高原・尾瀬岩鞍・尾瀬戸倉・尾瀬・ほたか・かたしな高原) 片品温泉、尾瀬、千明牧場、金精峠、丸沼ダム、日本ロマンチック街道、 白根魚苑、花の駅・片品 花咲の湯	
	檜枝岐村	檜枝岐温泉、三条の滝(日本の滝百選)、尾瀬、歴史民俗資料館、 檜枝岐歌舞伎、アルザ尾瀬の郷、ミニ尾瀬公園	
	魚沼市	温泉、尾瀬、スキー場(奥只見丸山・須原・小出・大原・業師・大湯温泉)、 登山、目黒邸、佐藤家、西福寺開山堂、永林寺、やな場(堀ノ内・広神・広瀬)	
イベント	片品村	オグナファイナルCUP スキー&スノーボード大会・尾瀬岩鞍高原旅館 組合リーゼンスラローム大会(4月)、水芭蕉の森ライトアップ(5月)、尾瀬 フェア(7月)、納涼盆踊り/花火大会(8月)、かかし祭り・猿追い祭り(10月)	
	檜枝岐村	会津駒ヶ岳山開き(5月)、燧ヶ岳山開き(7月)、真夏の雪祭り(8月)、 新そば祭り(11月)	
	魚沼市	しねり弁天たたき地蔵まつり(6月)、うおぬまふれあい夏の雪祭り(7月)、 枝折峠ヒルクライムinゆのたに・小出祭り・大の阪踊(8月)、 堀ノ内十五雪まつり(9月)、広神ふれあいまつり(10月)、国際雪合戦大会・ 雪中花水祝・須原スノーカーニバル(2月)、湯の里雪祭り「百八灯」・ 雪明かり雪中行群(3月)	
特産品	片品村	高原野菜(大根、トマト、とうもろこし、レタス、りんご、花豆、舞茸)、 尾瀬豆腐、尾瀬そば、アイスクリーム	
	檜枝岐村	舞茸、岩魚、山椒魚、山菜、裁ち蕎麦	
	魚沼市	魚沼産コシヒカリ、ユリ切花、山菜、きのこ、八色スイカ	
日本一	片品村	片品の猿追い祭り(国の重要無形民俗文化財)	
	檜枝岐村	奥只見ダム(水力発電量)、人口密度の低さ、平家の落人伝説	
	魚沼市	奥只見ダム(水力発電量)、魚野川の鮭(遡上距離100キロ)	

※出典：1) 東洋経済、『都市データバック 2010 年版』、2010 2) 市町村要覧編集委員会、『全国市町村要覧 [平成 21 年版]』、2009
3) 片品村役場 HP : <http://www.vill.katashina.gunma.jp/index.html>
4) 檜枝岐村役場 HP : <http://www.hinoemata.com/soumu/gaiyou.html> の内容を抜粋・再編集して作成

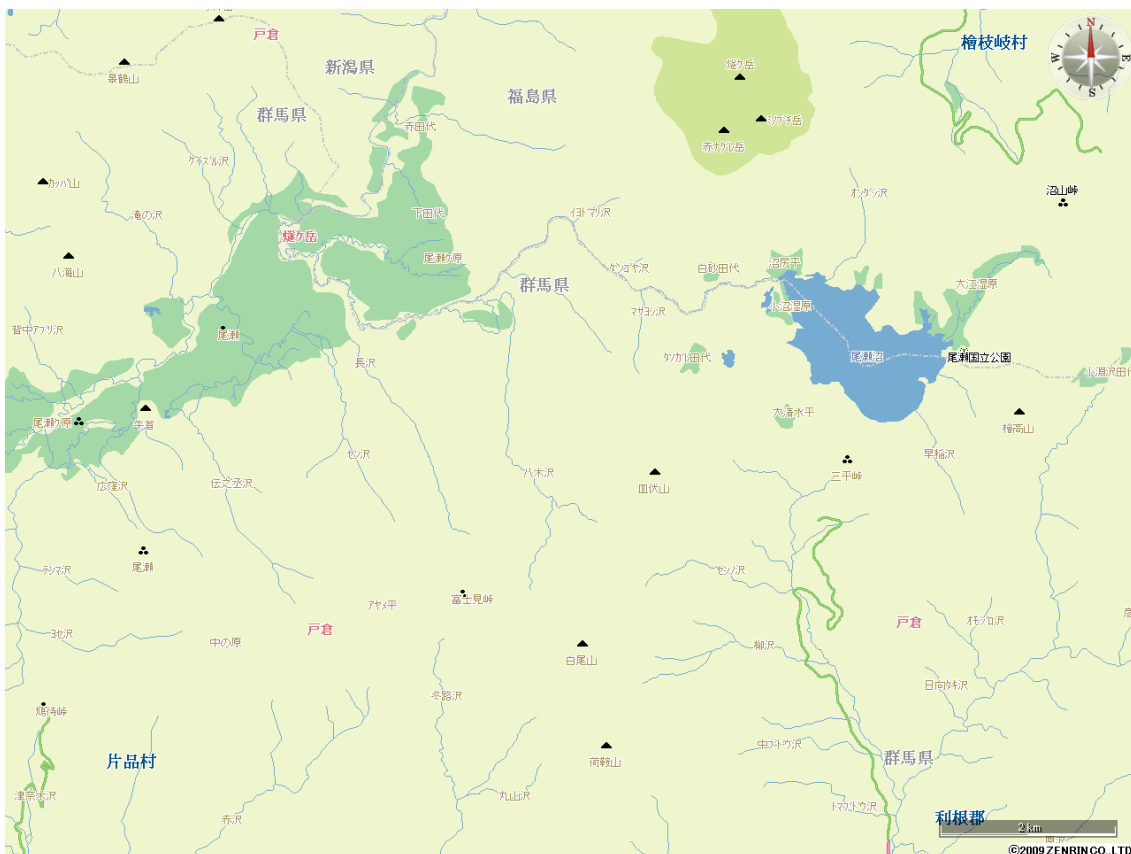


図-3.17：尾瀬の周辺地図

尾瀬の面積は、8690ha であり、福島県、新潟県、栃木県、群馬県にまたがっている。湿原や沼は、標高 1400m から 1700m の位置に広がっている。尾瀬観光に行く場合、鳩待峠、富士見下、大清水、御池、沼山峠、小沢平等、複数の入口がある。主要な入口の一つである鳩待峠までは、東京方面から向かう場合は関越自動車道、国道 120 号、国道 401 号等を経由し、約 3 時間かかる。途中、マイカーの規制・自粛奨励の区間があり、戸倉駐車場から鳩待峠まではバスや乗合タクシーを利用する観光客が多い。

尾瀬には、複数のハイキングコースがあり、初心者から上級者まで幅広く楽しむことができる。コースとして敷設された木道（総延長約 60km）は、元々は湿原のぬかるみを避けて登山者が歩くためのものであったが、近年では湿原保護の意味合いが強くなり、尾瀬の風物詩となっている。新緑や紅葉など季節によって様々な表情があり、ミズバショウ（5 月中旬から 6 月下旬）やニッコウキスゲ（7 月初旬から 8 月初旬）の開花時期に合わせて訪れる観光客が多い。

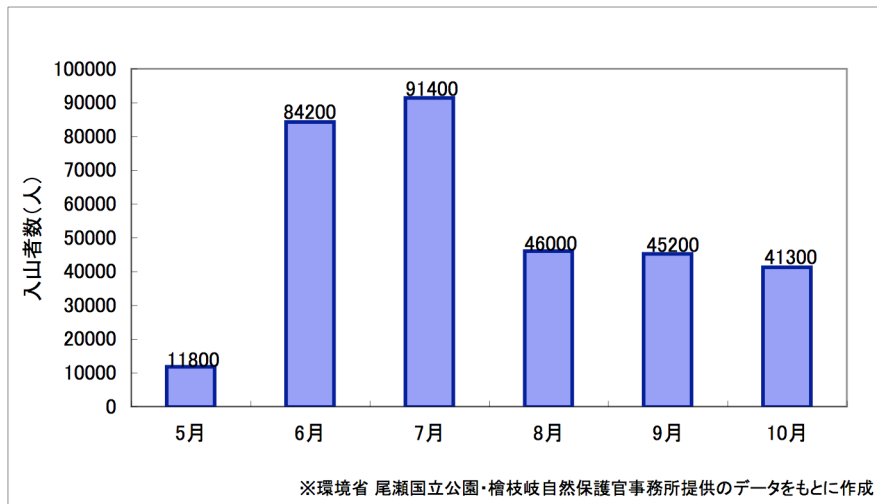


図-3.18 尾瀬の月別入山者数



写真-3.23 尾瀬の入口（鳩待峠）



写真-3.24 湿原と木道

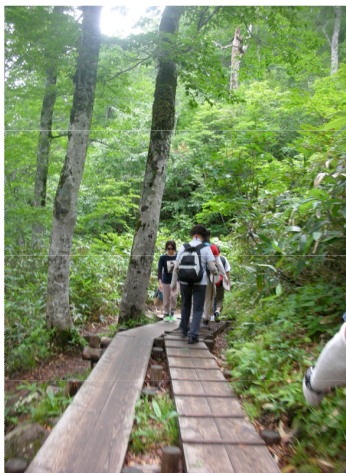


写真-3.25 混雑する木道



写真-3.26 山小屋



写真-3.27 東京電力のCSR

3.6-2 調査方法

調査は文献調査と実地調査を実施した。文献調査では、環境省尾瀬国立公園・檜枝岐自然保護官事務所、檜枝岐村企画観光課、片品村役場むらづくり観光課、魚沼市役所商工観光課から資料提供の協力を得た。この他、尾瀬へのアクセス、見所の整理と把握のため、JTB パブリッシング『尾瀬』を参考にした。尾瀬における自然保護の歴史に関しては尾瀬の自然を守る会『尾瀬を守る 自然保護運動 25 年の歩み』を参考にした。尾瀬における CSR の展開に関しては、尾瀬林業株式会社『はるかな尾瀬を永遠にー尾瀬を守り、育み、伝えるー』を参考とした。

3.6-3 尾瀬ブランドの変遷

尾瀬ブランドを取巻く出来事と観光客数の経年変化を図-3.19 にまとめた。

尾瀬は、1949 年に NHK ラジオにおいて「夏の思い出」が放送されたことで人気が高まった。以後、自然保護運動の発祥（1951 年）、木道敷設の開始（1952 年）、国立公園の特別保護区指定（1953 年）、天然記念物指定（1956 年）を経て、尾瀬ブームが訪れる。これに伴い、アヤマ平では湿地の裸地化が生じたが、戸倉と鳩待峠間の車道の開通もあり、1973 年には入込客数が年間 50 万人に達する。1960 年代後半から 1970 年代前半では環境保護運動に関しても、1966 年の裸地化回復事業、1971 年の尾瀬の自然を守る会の発足や道路工事計画の廃止など様々な動きが見られた。その後も、マイカー規制（1974 年）などの環境保護活動が実施されてきた。

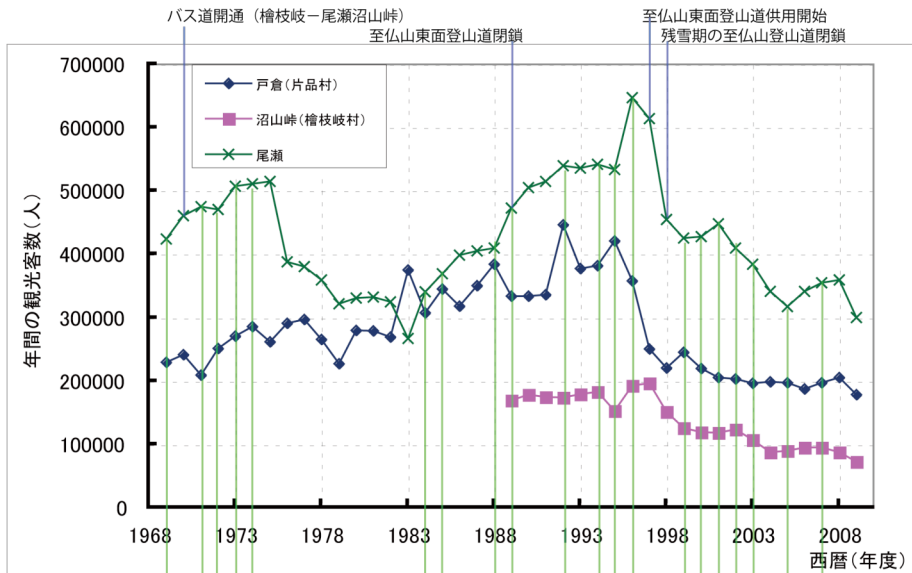
1974 年から 1983 年までは、入込客数が減少傾向にあり、1983 年には入込客数が年間 30 万人を下回った。その間は目立った環境保護対策が追加されることはなかった。その後、入込客数は再び増加に転じ、1989 年には日本の秘境百選や日本百景に選出され“冠”を獲得するとともに、山小屋の宿泊予約制度の導入や尾瀬保護財団の設立（1995 年）とその活動など、環境保護活動も再び盛んになった。

1996 年には、1903 年の水力発電ダム計画以来、大きな進展のなかった東京電力の発電所建設・分水路建設計画が正式に断念され、目的を達成した尾瀬の自然を守る会は解散する。入込客数は、1996 年の年間 64.7 万人をピークに、景気後退や登山道の季節閉鎖、観光バスの通行規制強化などから減少に転じた。

2005 年にはラムサール条約登録、2007 年には尾瀬国立公園として日光国立公園からの独立を果たし、“冠”の獲得・強化に成功した。同時に入込客数の減少は止まり、微増するものの、大きな回復には至っていないのが現状である。

1968 年以前

1890	平野長蔵が沼尻に行人小屋設置（尾瀬開山）	1951	期成同盟が母体となり「日本自然保護協会」結成 日本の自然保護運動の発祥
1903	水力発電ダム計画	1952	山口営林署が木道敷設開始
1920	尾瀬沼一帯を風致保護林指定	1953	日光国立公園特別保護地区に指定
1934	日光国立公園の一部に指定	1956	天然記念物指定 尾瀬ブーム
1938	日光国立公園特別地域指定	1958	尾瀬林業が木道敷設開始
1944	尾瀬沼の取水工事開始	1960	特別天然記念物指定
1949	取水工事竣工 「尾瀬保存期成同盟」結成 NHK ラジオ「夏の思い出」放送 尾瀬の人氣が高まる	1963	車道開通（戸倉一鳩待峠）
		1966	アヤマ平湿地裸地化回復事業（群馬県）
		1967	公園化計画決定に伴う道路問題勃発



アヤマ平湿地裸地化回復事業（尾瀬林業）
「尾瀬の自然を守る会」発足
道路工事・計画の廃止
群馬県尾瀬憲章制定
ゴミ持ち帰り運動開始
尾瀬からゴミ箱撤去
自然保護憲章制定
マイカー規制開始（鳩待峠・沼山峠）
日光国立公園尾瀬地域管理計画（環境庁）
ふくしま緑の百景選出（尾瀬・撫平とミスバショウ）
尾瀬地区保全対策推進連絡協議会設置
（環境庁・福島県・群馬県・檜枝岐村・片品村・湯之谷村）
日本の秘境100選選出
日本百景選出

尾瀬国立公園として独立
ラムサール条約に登録
関東・観光バスで行く名所100選選出
くま百名山選出
日本の重要湿地500選出（尾瀬ヶ原・尾瀬沼）
県道（一ノ瀬-岩清水）の廃止に伴うブナ植林
鳩待峠までの観光バス通行規制強化
「尾瀬の自然を守る会」解散
東京電力が発電所建設・分水路建設計画を正式断念
尾瀬保護財団設立
尾瀬子供サミット
山小屋宿泊定員予約制度導入
尾瀬サミット（群馬・福島・新潟）

図-3.19 尾瀬ブランドを取巻く出来事と観光客数の経年変化

3.6-4 尾瀬のイメージ認知/保全プロセス

尾瀬のイメージを変化させた社会・潜在的要素とその構造を図-3.20にまとめた。

尾瀬の開山は、1890年の平野長蔵氏によるものとされている。その後、水力発電ダム計画が持ち上がり、現在の東京電力が水利権を獲得する。1934年には国立公園指定を受けるが、その一方で、10年後には取水工事が始まり、戦時中の一時中断を経て1949年に竣工した。その間、平野長蔵氏やその息子の平野長英氏は、学者やジャーナリストの協力を得ながら、反対運動を展開し、1949年には尾瀬保存期成同盟を結成した。その後、尾瀬保存期成同盟は日本自然保護協会へと変化し、これが日本の自然保護運動の発祥と言われている。

一方、尾瀬を訪れる観光客は、1949年にNHKラジオが「夏の思い出」を放送したことをきっかけに、次第に増加するようになる。1952年頃からは木道の敷設も行われ、観光客を受け入れるための整備も進んだ。そして、1950年代中頃からは尾瀬ブームが訪れ、観光客は急増する。アヤマ平では、木道の敷設は完了していたものの、単線の木道では登山者の行き違いは不可能であり、結果として湿原の踏み荒らしや裸地化が進んだ。この頃尾瀬が特別天然記念物に指定されたことも関連して、1966年頃からは、全ての領域での複線木道の整備がなされる。この過程の中で、木道敷設の目的は、「湿原のぬかるみから登山者を保護すること」から「登山者の歩く道の限定と湿原保護」へと変化していった。また、観光客の増加に伴い、ごみの飛散が問題となった。これに対し、尾瀬の管理を行っている尾瀬林業は、ごみ箱の撤去をすることで、日本初のゴミの持ち帰り運動(1972年から)を始めた。

高度経済成長期の開発ブームの際には、尾瀬にも観光自動車道路計画が持ち上がった。これに対しても、平野長英氏の息子である平野長靖氏が反対運動を展開し、尾瀬の自然を守る会の設立や、設立間もない環境省に働きかけることで工事の中止とマイカー規制に至った。尾瀬の自然を守る会の目的は、1970年代にはほぼ達成していたが、しばらくは尾瀬自然保護指導員養成講座等を実施していた。その後、尾瀬サミットの開催や尾瀬保護財団の設立と仕事の受け継ぎを経て、1996年に尾瀬の自然を守る会は解散する。

尾瀬では、マイカー規制以外にも、山小屋の予約制の徹底(1992年-)や合併浄化槽とパイプラインの整備等により、オーバーユースやそれに伴う水質汚染に対応している。また、近年はラムサール条約への登録や尾瀬国立公園としての独立も果たし、環境保護活動は続いている。

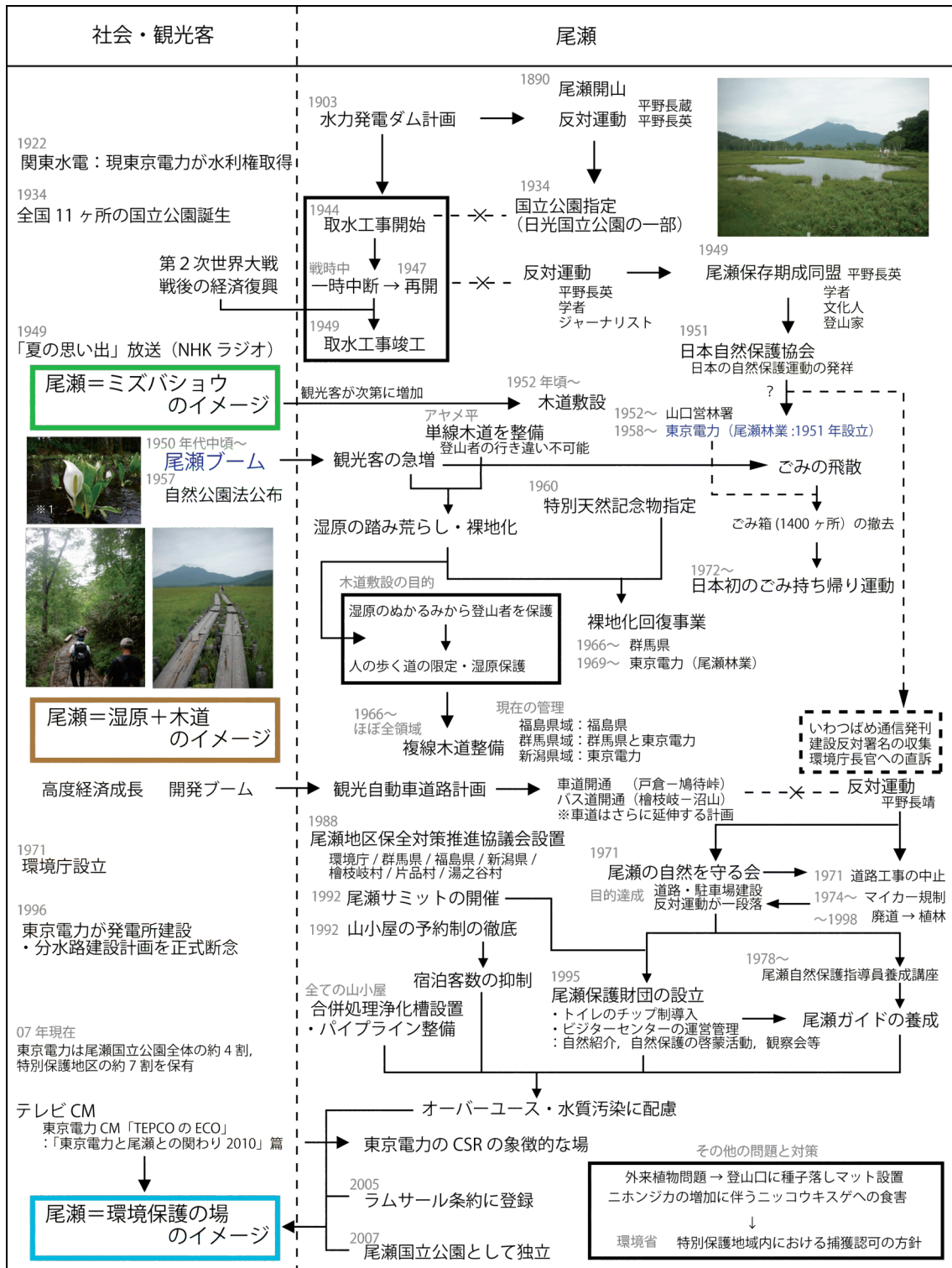


図-3.20 尾瀬のイメージを変化させた社会的・潜在的要素とその構造

写真 (※ 1) 出典 : <http://userdisk.webry.biglobe.ne.jp>, 2010年9月5日

3.6-5 尾瀬の利用目的の変化とCSRへの展開

木道敷設、裸地化回復事業、ゴミの持ち帰り運動、5つの山小屋の経営と予約制導入、浄化槽式トイレの整備などを主導しているのは、尾瀬を管理している尾瀬林業である。尾瀬林業は、尾瀬の水利権を持つ東京電力の子会社である。現在、尾瀬地域の群馬県側は全て東京電力の所有地であり、環境省及び各自治体と共に尾瀬の保護主体となっている。東京電力は元々、発電所建設を推進する立場であった。しかし、少しずつ観光利用のための整備が行われ、観光資源の保護の立場をとるようになり、環境保護活動や環境教育活動も展開してきた。最近では、テレビCM（TEPCOのECO：「東京電力と尾瀬の関わり 2010」など）で木道敷設やその他の環境保護活動の様子を放映するなど、尾瀬を東京電力のCSRの場として活用している。すなわち、社会的需要や開発反対運動を受ける中で、尾瀬の利用目的は、(1) 電源開発、(2) 観光利用、(3) 環境保全、(4) CSRの場へと変化していった。現在では電源開発の場ではなくなったが、観光利用、環境保全、CSRは共存状態にある。尾瀬の事例に関して言えば、観光利用により、裸地化などの問題は生じたが、対策がとられ、資源破壊は終息したように見える。また、結果として、ダム建設計画を環境保護へと変化させた過程に観光利用が存在しており、観光利用によりダム建設という決定的な破壊を免れた場であるといえる。